

PREVENTION No.327

2020年1月16日開催

依存症治療における社会資源

高山 輝大(独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター)

依存になるまでの経過は、習慣→定着→支障→問題（表面化）→破たんという経過をたどる。本人の変化としては、自分の意志でいつでもやめられると思っているが、徐々に時間、頻度、量が増え、結果的に生活習慣が崩れ、食生活の乱れや家族や他人に迷惑をかける、やめようと試みるもやめられないなどが生じてくる。さらに家族との関係悪化が深刻となり、離婚問題、健康問題、金銭問題など多問題が起きている中で、専門家のところに登場することが多いように感じる。

当院で行っている依存症治療は、精神療法、薬物療法をはじめ、グループミーティング、依存症についての勉強会、生活のリズム作り、社会的なサポート（環境調整）、家族介入などを行っている。ソーシャルワーカーは社会的なサポート（環境調整）や家族介入などで支援に携わっており、本人との信頼関係を構築しながら面接を続け、時には行政との連携などを行いながら社会資源につなげる役割を担っている。しかし、本人は様々と問題が多くあるにも関わらず、問題から目を背けてしまったり、否認したりすることがあるため、家族関係は深刻な状況となり、より孤立を感じながらの生活となっていく。そのような中で、主治医やソーシャルワーカーなどから今後についての提案をしてもスムーズに社会資源につながることは稀であるため、本人を尊重しながら時間をかけ一つ一つ調整していくこととなる。

携わるにもまずは信頼関係を構築することが重要であり、本人の気持ちや想いを尊重しながら本人が今の現状（環境）をどう理解し認識しているのか、問題として捉えているのかどうか？今後ど

ういう生活を目標としているのか？などを確認し、回復には時間を要することを共有しつつ、目標を決めてやれるところから始めていく。また、再発があっても否定をしないで主体的に取り組んでいけるよう携わることが重要となる。